

5 ベクトル場・スカラー場 (その 3)

スカラー場の方向微分. f を (x, y) -平面上のあるスカラー場, $\mathbf{u} = (\lambda, \mu)$ をある単位ベクトルとする. また, 平面内のある一点 $P = (a, b)$ をとり, P から \mathbf{u} 方向に s だけ進んだ点を $P_s = (a + s\lambda, b + s\mu)$ と書くことにする. このとき, f の P における \mathbf{u} 方向の方向微分 $D_{\mathbf{u}}f(P)$ を,

$$D_{\mathbf{u}}f(P) = \lim_{s \rightarrow 0} \frac{f(P_s) - f(P)}{s}$$

により定義する. これは P における f の「 \mathbf{u} 方向の」変化の度合いを表している. ここで, P を通り \mathbf{u} に平行な直線を s の関数として $\mathbf{r}(s) = (a + s\lambda, b + s\mu)$ と表せば,

$$D_{\mathbf{u}}f(P) = \frac{d(f \circ \mathbf{r})}{ds}(0) = f_x(a, b)\lambda + f_y(a, b)\mu$$

を得る. つまり $D_{\mathbf{u}}f$ は \mathbf{u} と $\text{grad } f$ との内積である¹:

$$D_{\mathbf{u}}f = \mathbf{u} \cdot \text{grad } f.$$

ここで, $D_{\mathbf{u}}f(P) = \mathbf{u} \cdot \text{grad } f(P)$ は $\text{grad } f(P)$ の \mathbf{u} 方向成分を表すので, \mathbf{u} が $\text{grad } f(P)$ と同じ方向のときに最大になり, \mathbf{u} が $\text{grad } f(P)$ と逆向きのときに最小になる. というわけで教科書に書いてあるように, $f(x, y)$ は $\text{grad } f$ の方向に最も急激に増え, $-\text{grad } f$ の方向に最も急激に減るということが分かる. 例えば, f を地図上の標高を表す関数とすると, 地点 P に立って周囲を見渡した時に最も急な上り坂になっている方向が $\text{grad } f(P)$ であり, 最も急な下り坂になっている方向が $-\text{grad } f(P)$ であるということになる.

なお, 平面上のスカラー場だけでなく, 一般に \mathbb{R}^n 上のスカラー場で考えても同様のことがいえる.

勾配とラプラシアン. (x, y, z) -空間での勾配を考えると, 形式的に

$$\nabla = \left(\frac{\partial}{\partial x}, \frac{\partial}{\partial y}, \frac{\partial}{\partial z} \right)$$

という演算子を考えて $\text{grad } f$ を ∇f と表すことがある. また

$$\nabla^2 (= \nabla \cdot \nabla) = \frac{\partial^2}{\partial x^2} + \frac{\partial^2}{\partial y^2} + \frac{\partial^2}{\partial z^2}$$

¹教科書の記述に合わせて, ここでは内積をカッコ (,) ではなく中点 \cdot で表すことにします.

を考えてこれを Δ と書き, ラプラシアンと呼ぶ. すなわち

$$\nabla^2 f = \Delta f = \frac{\partial^2 f}{\partial x^2} + \frac{\partial^2 f}{\partial y^2} + \frac{\partial^2 f}{\partial z^2}$$

である. この演算子およびラプラス方程式と呼ばれる微分方程式 $\Delta f = 0$ は物理学で重要な役割を果たす.

演習 5.1 (x, y, z) -空間内の原点に質量 M の質点 O が固定されており, また, 質量 m の別の質点 P が空間内を動き回っているとす. ニュートンの重力理論によれば, このとき O と P の間に万有引力が作用する. P の位置ベクトルを \mathbf{r} , OP 間の距離を r , 万有引力定数を G とし, $c = GMm$ とすると, P から O に向かう方向に働く引力 \mathbf{F} は

$$\mathbf{F} = -\frac{c}{r^3} \mathbf{r}$$

となる. \mathbf{F} は P の関数なので, ベクトル場と考えることができる (いわゆる重力場).

(1) r を P の関数と考えて, スカラー場 f を $f(P) = c/r$ により定義する. このとき \mathbf{F} は f の勾配である ($\mathbf{F} = \text{grad } f$) ことを示せ. (このような f を \mathbf{F} のスカラーポテンシャルという.)

(2) (1) の f はラプラス方程式 $\Delta f = 0$ を満たすことを示せ.

ベクトル場の発散と回転. \mathbb{R}^n のある領域で定義されたベクトル場

$$\mathbf{v} = (v_1(x_1, \dots, x_n), \dots, v_n(x_1, \dots, x_n))$$

に対し, \mathbf{v} の発散 $\text{div } \mathbf{v}$ を

$$\text{div } \mathbf{v} = \frac{\partial v_1}{\partial x_1} + \dots + \frac{\partial v_n}{\partial x_n}$$

により定義する.

以下 $n = 3$ とする. このとき \mathbf{v} の回転 $\text{curl } \mathbf{v}$ を

$$\text{curl } \mathbf{v} = \left(\frac{\partial v_3}{\partial x_2} - \frac{\partial v_2}{\partial x_3}, \frac{\partial v_1}{\partial x_3} - \frac{\partial v_3}{\partial x_1}, \frac{\partial v_2}{\partial x_1} - \frac{\partial v_1}{\partial x_2} \right)$$

により定義する. $\text{curl } \mathbf{v}$ を $\text{rot } \mathbf{v}$ と書くこともある. $\text{div } \mathbf{v}$ と $\text{curl } \mathbf{v}$ は形式的には,

$$\text{div } \mathbf{v} = \nabla \cdot \mathbf{v} = \frac{\partial}{\partial x_1} v_1 + \frac{\partial}{\partial x_2} v_2 + \frac{\partial}{\partial x_3} v_3,$$

$$\text{curl } \mathbf{v} = \nabla \times \mathbf{v} = \begin{vmatrix} \mathbf{i} & \mathbf{j} & \mathbf{k} \\ \frac{\partial}{\partial x_1} & \frac{\partial}{\partial x_2} & \frac{\partial}{\partial x_3} \\ v_1 & v_2 & v_3 \end{vmatrix}$$

と書ける.

演習 5.2 3次元空間内の領域で定義されたベクトル場 \mathbf{u}, \mathbf{v} とスカラー場 f に対し、次の関係式が成り立つことを確認せよ.

- (1) $\operatorname{div}(\operatorname{grad} f) = \Delta f,$
- (2) $\operatorname{curl}(\operatorname{grad} f) = \mathbf{0},$
- (3) $\operatorname{div}(\operatorname{curl} \mathbf{v}) = \mathbf{0},$
- (4) $\operatorname{div}(f\mathbf{v}) = f \operatorname{div} \mathbf{v} + \mathbf{v} \cdot \operatorname{grad} f,$
- (5) $\operatorname{curl}(f\mathbf{v}) = f \operatorname{curl} \mathbf{v} + \operatorname{grad} f \times \mathbf{v},$
- (6) $\operatorname{div}(\mathbf{u} \times \mathbf{v}) = \mathbf{v} \cdot \operatorname{curl} \mathbf{u} - \mathbf{u} \cdot \operatorname{curl} \mathbf{v}.$

[追記] 出てくる関数はすべて C^2 級と仮定する.